

『精神現象学』とファッション

——自己意識を中心とした考察——

大澤 真希子

序

「私はどんな人間だろうか」、「私は周りからどのように見られているだろうか」。このようなことを誰でもこれまで、一度は考えたことがあるのではないだろうか。自分が自分を意識する時、もちろん主体は自己であるが、対象もまた自己自身である。主体と対象というのは相反する存在である。だが、自分自身を意識すること、すなわち自己意識の場合には、主体も対象も自己自身なのだ。しかしながら、自己意識は同時に、自己自身のみでは成立しない。外的対象という契機を必要とするのだ。ヘーゲルは『精神現象学』において自己意識について次のように述べている。

自己意識は感覚的世界から反照したものであり、本質的には他在から帰ってきたものである。(Aber in der Tat ist das Selbstbewußtsein die Reflexion aus dem Sein der sinnlichen und wahrgenommenen Welt und wesentlich die Rückkehr aus dem Andersein.) (20 § 4)

この帰ってくるという表記の仕方は、実にヘーゲルらしい。彼は、自己意識はまるで生きているもののように運動する、と言うのだ。この自己意識の運動とその構造に私は興味を持った。自己意識はどのように展開し、どのような構造を持つのか、詳しくは本論で記していくことにする。

ところで、今や我々の日常生活において、ファッションは欠かすことの出来ないものである。ファッション、と言つても、様々な意味を持つ。流行、ある時代・ある地域の服装や行動様式、一時的な風習、価値観など……。しかし、本論においてはファッションの定義を衣服、装いと限定する。ファッションは自己の身体にまとうものである。すなわち、ファッションは可視的なものであるので、他者の意識に入っていくことが可能であるし、また、入っていくものである。我々はファッションという媒体を介して、自己と他者の意識に流動的な相互関係を成立させるのではないだろうか。このファッションにおける自己と他者の自己意識の関係と、『精神現象学』における自己意識の展開と構造に、類似性があるように思われる。

第一章 ファッションにおける自己意識

1. ファッションとは何か

身体は人間にとって、自らの存在を条件づける環境であるとともに、人間そのものの存在と切り離すことは出来ない。しかしながら、人間の身体とは衣服を着た存在でもあることも事実だ。我々は、衣服によって覆われた身体に

よって構成された世界として、社会を考えることが出来るだろう。例えば、ビーチやベッドルームといった身体の一部を露出する状況においてさえ、何らかの衣服を身にまとう。

ところで、ファッションは現代の若者にとつて、着る人の存在を社会的に表象する記号としての機能を持たせるものとしての役割を持つている。例えば、『CarCam』（小学館）は、二〇〇七年度女性ファッション誌の中で一番の売上げ部数を記録したが、そこには「モテかわ」ファッションという言葉があった。「モテかわ」とは、「モテる」＋「可愛い」を合成した造語である。この言葉は、周りから「可愛い」と言われ、異性同性問わず好感を持たれるようなファッションを表象する記号としての機能を持たせている。

もちろん、ファッションは、着る人の存在を社会的に表象する記号としての機能だけではない。ファッションはもう一つの機能、すなわち人間の肉体を外部から保護するモノとしての機能を持っていた。北山晴一氏の『モードの権力』には次のように書かれている。

肉体を保護するモノとしての衣服という視点から見る

ならば、人類はほぼその目的を達成したと言つても過言ではない。目的達成の歩みは、一世紀あまりをかけた緩やかな歩みであつたといえ、また地域によつて歩みの速度に大小の差があつたといえ、男女ともに新しく、快適な、しかも多少のエレガンス(1)を備えた衣服を着ることが、市民生活のごくふつうの光景になつてゐるからである。交通手段の発達、生地生産の機能化、そして既製品の発展などが、このような進歩を可能にしたのである。(『モードの権力』1章3—7)

このように、肉体を保護する機能としての衣服は達成されてゐるとすれば、衣服、すなわちファッションに残されてゐるのは、人間を社会的に表象する記号としての機能のみとなる。先程、私はファッション誌を取り上げたが、もちろん雑誌に載つてゐるようなファッションに関心のない人もゐる。しかし、そういう人達も、衣服を単に、肉体を保護するモノとしての機能としてのみ見なしてゐるわけではない。そういう機能は、もう達成されてゐるのだ。

例えば、結婚式に出席する時、人々は礼服を着ていくだろう。また、葬式に出る際は喪服を着ていき、就職活動の際はリクルートスーツを着る。このように、人々はT・P・

Oを考え、衣服を選ぶ。もしも、これを考えずに場違いな衣服を身にまとつた場合、その人は「非常識な人間」と見なされるからである。このように、現代においてファッションはすでに、着る人を社会的に表象する機能を果たす役割の方が強いのである。

「モテかわ」ファッションも、T・P・Oをわきまえたファッションも、相対的な枠組みを前提として成り立っていると考えられる。すなわち、ファッションには他者存在が前提とされている。

2. 身体としての自己の存在

人間は、自分の身体の視覚データについていえば、他人のほうがわたしについて、はるかに多くの情報を持つてゐる(2)。わたしたちは自分の身体のごく一部しか直に見ることは出来ないし、他人がわたしを認知するわたしの顔も、わたしは直に見ることが出来ない。すなわち、わたしが見るわたしの身体と、他人が見るわたしの身体との間にはズレがあり、その関係は不整合(3)なものなのだ。

人は自分の身体を見る時、自分の情報だけでは不十分である。人は、他人のまなざしに身体としての自分の存在を映す。わたしと、わたしの身体の可視的な表面との隔たり

は、他人のそれによって媒介され、埋められる。しかし、他者とその可視的な表面との隔たりもまた、同じように私の身体の可視性を媒介することによって埋められるのだ。すなわち、結局、わたしの身体と他者の身体は、相互補完的に作用しあう。

しかし、わたしの身体理解には必ずや不整合が生じるのだが、それにも関わらず、わたしはわたしの身体を、他人のまなざしからも大きくズレることもなく、客観的に理解することが可能だ。この不整合を調整する機能を果たすものを、私はファックションであると考える。

ファックションは自他にとつて、共通の可視性を持つている。人々は、それぞれがセルフ・イメージを補強したり、相互に調整するために、共通の可視性を持つファックションによつて自分の身体的存在を加工したり、変形することが出来る。これにより、同じ意味の衣服を身にまとうのだ。解の整合性によつて、自己自身が持つ身体の可視的な表面との隔たりや、他者とのそれを埋めようとすると考えられるのである。

3. ファックションにおける自己意識

ファックションは、自己と他者の共通の可視性であり、他

人に自己のイメージを示すものである。人は、ファッションが生み出すイメージによつて、互いの不整合を調整しあうのだ。つまり、わたしはファッションを身にまとうことでわたしの身体と、それを見る他者のまなざしにある程度の整合性を持たせ得る。すなわち、人々は縫い合わされた衣服の中に、共同で様々な意味を書き込んでいく。わたしたち一人一人をそれぞれの「わたし」という存在へと媒介するための経路に、身体の変換の共同的なプロセスが介入していくのだ。

人は「こう見られたい」という願望を、ファッションが生み出すイメージに委ねることで、他者からのまなざしを獲得することが出来る。すなわち、セルフ・イメージはファッションという共通の可視性によつて他者に伝えることが出来、他者による自己の身体理解と自己による自己の身体理解を調整してくれるのだ。人は、ファッションを身にまottつた、自己の身体を意識する際、他者の存在を媒介し、そしてファッションが生み出すイメージによつて、不整合の統一が可能となるのである。ファッションは、自他に共通の可視性により、自己の身体に何らかの意味⁽⁴⁾をつけ、他者に伝えることが出来る。そして、他者に自分がどう見られているのかを意識するわけだ。これがファッ

ションにおける自己意識の基本的な構造である。

ファッションにおける自己意識の構造がどのようなものであるかを詳しく述べる前に、『精神現象学』における自己意識の構造を見ていただきたい。

第二章 『精神現象学』における自己意識

1. 欲求

『精神現象学』における「自己意識 (Selbstbewusstsein)」は、外的対象についての意識の経験の旅を続けてきた結果として、他者と出会い、他者を介して自分をとらえ返すところに成立するものである。

自己意識は、その対象として(5)は他者をではなく、自己を意識している。自己意識においては、対象は意識のうちに包み込まれているから、意識に対する存在はない。それでも対象は本質的には自己であるが、現象としては他者である。その限りで、対象は自己意識にとっては否定的な存在であり、否定されるべき存在である。自己意識は対象の存在を否定することによって、対象が自己であるという主観的確信を客観的真理にまで高めようとする。こうして「欲求 (Begierde)」を満足させようと試みるのだ。そこで、

自己意識は第二の段階、すなわち欲求の対象が「生命」であることに移行していく。

2. 生命

欲求を満たすためには、「対象 (Gegenstand)」がなくてはならない。欲求の対象は、意識から独立に存在するものではなく、意識においてそのように現象するにすぎず、本質的には自己に属する。自己意識の立場からすれば、区別があつても、この区別は統一(6)へと移行し、またその統一が区別へと移行する。いまや、対象はこのような移行ではあるが、移行が自覚的に行われるようになると、対象は自己意識である。しかしそれは欲求の対象としては自覚を欠く「生命」にとどまっている。すなわち、同一のものから多くの形態、つまり対立へと移行する運動と、逆に多くの対立から統一を取り戻す運動である。生命は統一ある普遍(7)を否定し、多くの個別へと分散するが、これらの個別は普遍的生命を实体として存立している。それゆえ、個別は自立しているが、やがては普遍的生命のうちに解消していく。そして生命は、普遍と個別の統一と対立を繰り返していく。こうして、生命は普遍と個別との、統一と対立の円環(8)過程となる。

3. 欲求の満足

欲求という形態をとった自己意識は、対象の存在を否定することに於いて、対象が自己であるという主観的確信を客観的真理にまで高めようとする。これが欲求の満足である。ところが、欲求の満足において、自己意識はかえって対象の自立を経験する。なぜならば、欲求を満たすには対象を否定し、廃棄しなければならぬが、否定し廃棄するためには、そもそも対象が必要となるからである。そこで、自己意識が満足を得るには、対象を否定するに止まらず、むしろ対象の方でも自己を否定して、しかも対象としての自立を保持するでなければならぬ。一方において自己を否定しながら、同時に他方において自立を保持するものとは、自己意識である。すなわち、自己意識は他の自己意識との関係においてのみ満足を得ることが出来るのである。このように、自己意識は生命においては、欲求の満足が得られず、他の自己意識との関係に移行していくのだ。

第三章 自己意識と自己意識の関係—承認—

1. 承認

自己意識が他者と向き合うとき、いわば二重の自己喪失

をもつ。一つは、自分は他者にとつての自分となることである。そして、二つ目は、他者は自分にとつての他者となる(他者のうちに自分を見る)ことである。自己意識は、自己性を取り戻すために、「自らの他在 (sich im Anderen)」を廃棄しなければならぬ。これも二重の意味を持つ。一つ目は、まず、他者の自立的存在性を否定しようとすることである。また、二つ目は、他者の自立的存在性を否定することが、実は他者にとつての自己というものを廃棄することであるということだ。このような他者の撤廃の試みは、同時に自己にとつて自己自身に帰る試みでもある。

ここまでは、自己意識の側の、一方的な對他者意識のあり方を見てきたが、しかし「われわれ」とつては、この意識の運動は双方向的なものであることが明らかになっている。すなわち、ここでは一方的な行為というものは存在せず、全ての行為とそれについての意識は双方向的なのである。自己意識と自己意識の相互承認は、一方の自己意識が他方の自己意識を自己意識として承認し、その逆も成り立つ場合において成立する。自己意識の間に、相互の承認が成立すると、一方の自己意識は他方の自己意識の中に自分自身を見出すことになる。すなわち、一方の自己意識がそれ自身において、他方の自己意識でもあるのだ。

相互承認が成立している場合には、一方の自己意識は自己を否定して、他方の自己意識を肯定する。そして、更に他方の自己意識においても同じことが行われる。このように、自己否定を通して自己肯定がいずれの自己意識においても行われる場合においてのみ、自己意識と自己意識の相互承認が成り立つのである。

2. 承認のための生死をかけた戦い

はじめは、自己意識は、単なる自分だけの存在、単なる自我 (Ich) として現われる。それは他者を持たず、他者とは無関係である。このような直接態においては、他者は単なる「自分ではないもの」、つまり、自分にとって本質的ではない否定的な対象にすぎない。しかし、他者もまた一つの自己意識であるので、この関係においては互いが相手への反対者として現われることになる。すなわち、ここでは対象は生命を持った自己意識として現われるのだ。そこで、両者は互いに相手の生命を否定することで、対象にとつても真であることを示し、承認を得ようとするのだ。これが「承認のための生死をかけた戦い」である。この戦いによって、両者は、自己存在の確証を客観的なものとなそうとするのだ。

両者は、初め等しくなく、対立しており、統一に反照「看」することもまだ起こっていないので、意識の二つの対立した形態となつて在る。一方は独立な意識であつて、自分だけの有「対自存在」を本質としており、他方は非独立な意識であつて、生命つまり他者のための存在を本質としている。前者は、主であり、後者は、奴である。(da sie zunächst ungleich und entgegengesetzt sind und ihre Reflexion in die Einheit sich noch nicht ergeben hat, so sind sie als zwei entgegengesetzte Gestalten des Bewußtseins; die eine das selbstäs Sein für ein Anderes das Wesen ist; jenes ist der Herr, dies der Knecht.) (21 § 4-A)

つまり、向き合つて関係する自己意識は、「主(Herr)」と「奴(Knecht)」との関係を作り上げることになる。

3. 主と奴

「主」は主奴関係において、実はそれ自体として純粋な自己意識なのではなく、非自立的な存在である「奴」という媒介項を通して自立的な存在となつている。すなわち、一方で「意識」を持った存在であるとともに、他方で従属的

な「物」的存在でもある二重性をもった「奴」との関係によつて、主ははじめて自己の自立性を保てることとなる。ここに主奴関係が成り立つわけではあるが、主は奴との媒介的關係にも二つの面を持つ。一つは、まず、主は自身自身の「自立的存在」を介して奴に關係する。というのは、主は戦いの際に物に対する絶対的な自立性を譲らなかつたという点で、自分の威力を打ち立てているからだ。つまり、主はいわば、「死の威力」を持つて、奴に支配力をふるい、奴を労働させる。二つ目は、主は奴を介して物に關係するわけだが、それはすなわち、主は奴の労働を支配し、そのことを通じて物を自由に享受するのだ。

一方、奴の方は、「自己意識」であるという点では、物に對し、否定することは出来るが、ただ物に労働を加えることが出来るだけで、それを自己のものにすることが出来ない。それは主が奴への支配力を持っているからである。主は奴の労働を介して、物と關係し、物に対する純粋な否定力 \parallel 直接の支配力を持つことが出来る。すなわち、奴の労働によつて、物の非自立性とだけ結びつき、物をひたすら享受する。しかし主は主奴關係が成立するやいなや、自分の存在の非自立性を意識せざるをえなくなる。そして、自立的存在としての可能性を持つのは、むしろ奴の存在であ

ることが明らかになってくる。そうして、双方の自己意識は自立存在と他者依存が分離した關係から、両者が互いに転換する、普遍的な關係へ移ることとなる。

第四章 「精神現象学」とファッション

1. 構造的類似性

身体の自己意識も「精神現象学」と同じように、自己の存在のみの自己意識では満足を得ることは出来ない。そこで、他の自己意識の存在を必要とする。身体の自己意識は、先に述べたように、他人のまなざしを必要とするのだが、そこに生じる不整合を、ファッションはこの両者を媒介し、調整しようとする。

ところで、我々が普段、衣服を着用する際、果たしてその対象は自己の身体だけであろうか。自分にとつて似合う服、自分が可愛いと思う服、など、自分自身だけを意識しているのであろうか。私はそうは思わない。他人がどのようになんて自分を見るか、ということ、すなわち他者の存在を孕んでいるはずだ。第一章で、「CanCam」という雑誌の「モチかわ」について書いたが、「モチる」という言葉も他者存在を前提としているし、「可愛い」という言葉も、ここでは

可愛いと周りから思われるファッションを装うことが、モテることに繋がるので、モテるような可愛いファッション、ということから他者存在を前提としている。

ここで、『精神現象学』における自己意識と他の自己意識の関係に戻ることにする。自己意識は他の自己意識に対してあり、承認を目指していく。ファッションにおいて、自己意識は他者にどう見られるか、という自己意識が出てくる。ここに私は、自己の身体への自己意識と、他者の自己意識との不整合をファッションという媒体を通して「承認」に至ろうとするのではないかと考えた。ここで対象として現れる他者の意識についてだが、現代の社会生活において、他者もまた衣服を身にまとう存在であり、他者の側にもファッションにおける自己意識が発生するということがある。

「モテかわ」の場合を、再度とりあげることしよう。今、自分自身が「周りから可愛いと思われ、モテる」ようなファッションをしてみたとする。ここでは、自己にとつて他者は「モテかわ」の自分を語りかけ、そう見られていると意識する。ここで、ファッションにおける自己意識は二重の喪失を経験する。一つは、自分は他者にとつての自分となることである。そして、二つ目は、他者のうちに自

分を見ることが、他者は自分にとつての他者となることだ。しかし、自己意識は自己性を取り戻さなければならぬ。というのは、あくまで衣服を着用しているのは「私」自身であり、他者のためではなく、自己のためだからだ。

そのため、自己性を取り戻すために、「他者のうちの自己」(ここでは、モテるような可愛いファッションを身にまとった自己)を廃棄しなければならない。これには二重の意味がある。一つ目は、まず、他者の自立的存在性を否定することである。そして二つ目が、これにより、ファッションにおける自己意識は、あくまで「他者の中にいる自分」ではなく、自己自身に戻るのである。

このように、ファッションにおける自己意識は、自己自身に止まらず、他者を否定し、廃棄することで、「衣服を着た自己」の自立を保持しようとする。そして、それを見る側の他者との間に関係を築こうとするのだ。しかしながら、「他者の中の自己」を廃棄してしまつては、「モテるような可愛いファッション」を身につけた自分は存在しえない。よつて、これだけではファッションにおける自己意識は成立しない。そこで、自己の自立性を保ちながらも、他在を保つていかなければならなくなる。

自己にとつて、自己のファッションを成立させるために

は、他者の自立性を殺ぎ、自己存在の自立性を自己に対してだけでなく、他者にとつても真であることを示し、承認を得なければならぬ。それは他者にとつても同じである。この「せめぎ合い」こそが、いわば「生死をかけた戦い」である。このせめぎ合いによつて、自己は「自分がどのようなファクションを身にまよつてゐるか」という自己存在の確証を客観的なものとなそうとする。これにより、「モテかわ」ファクションを装う自己の自立性が保たれながらも、他者に語りかけることが出来たならば、「モテかわ」ファクションは成立する。その時、自己は「主」となり、他者は、ファクションを受け取る側の「奴」となる。

しかしながら、この関係は逆転の可能性を孕んでいる。主奴関係において、奴の行為は主の命令によるから、本質的には主の行為である。すなわち、「モテかわ」ファクションを装う自己は、「そういうファクションを装つてゐることを意識しなさい」と奴に語りかける。奴は、主のファクションが「モテかわ」であると捉える。しかし、「モテかわ」ファクションであることは、奴がそう意識しなければ成立しない。このときには、主は奴の意識に依存していることになるのではないだろうか。

このように、「精神現象学」における自己意識と、ファク

ションにおける自己意識の構造は類似している点が多い。自己意識は対象を必要とし、対象を介して自己に帰つてくるものという構造は、ファクションにおける自己意識が常に他者なる存在があるということ、そしてその他者によつてどう捉えられるかを意識しているという点で、自己は他在にあり、そして最終的には高次な意味においての自己に戻つてくるという構造とよく似てゐる。

2. 相違点

これまで、ファクションにおける自己意識と、「精神現象学」における自己意識の構造的類似性を述べてきたが、もちろん、両者には相違点が存在する。かつて衣服は、地域差、職業差、身分差、経済差、男女差、などによつて、大きく異なつていた。現在では、かつてほどの差異は生じないものの、多少なりとも差異は残つてゐる。ここでは、年齢差を例に出すことにする。「モテかわ」ファクションというものは、十代、二十代には通用するであろう。しかし、それ以上の年代にはどうか。「モテかわ」という言葉すら知らないかもしれないし、六十代にとつては「モテかわ」ファクションではないかもしれない。この時、「モテかわ」ファクションは成立しない。

すなわち、どれだけ「主」が自己の自立性を保つことが出来たとしても、それは他者にとつて、真には至らないだろう。生死をかけた戦いでは、どちらかが勝利を手にし、主として、自己の自立性を確保し、他者の非自立性を認めるように至るわけだが、ファッションにおいてはそうはならない。たとえ、他者に承認されなくとも、自己は自立性を保てるし、他者もまた、自立性を保つことが出来る。このように、ファッションにおける自己意識において、自己と他者の双方の自立性は損なわれることなく、保ち続けることが可能となることもある。全てを『精神現象学』における自己意識の現象に当てはめることは難しいこともまた、事実である。というのは、『精神現象学』の自己意識は、自己そのものを対象としており、ファッションにおける自己意識は、自己の身体を対象としているからである。

結 語

以上のように、『精神現象学』とファッションの両者における自己意識の構造には、相違点も存在するが、それよりも私は、双方における構造的共通性を積極的に認めたい。『精神現象学』において、自己意識は他者と出会い、他者を

介して自己を捉え返すという運動を持つ。これと同じように、ファッションにおける自己意識も、装う自己を意識するには、自分を見る他者の存在を介して、「自分はどう見られるか」と、見られる自分をとらえ返すところに成立する。このように、両者の自己意識の対象は「自分自身（の身体）」でもあり、「自分（の身体）を見る他者」の二重性を持つところに、類似性を感じる。そしてこの二重性は統一されるのである。

現代において、ファッションは「〇〇系」と系統を分けられることが多い。例えば、ギャル系、モテかわ系、アメリカ系（アメリカンカジュアルの略）、ゴスロリ系（ゴシックロリータの略）など。どの系統のファッションを装う人々も、「〇〇系のファッションをしている」自己を意識しながら、そういった自分を見てくれる他者の存在も意識している。しかし時折、こういった「〇〇系」という括りに自分が入られることを嫌う人もいる。こういった人達は、多くはファッションについて「個性がない」という。人と違った格好をしたい、という意識もまた、ファッションにおいて自己だけでなく、実は他者の存在をも意識しているのである。この点で、どんなファッションにおいても、自己と他者という二重の対象を意識しているのではないだろ

うか。

『精神現象学』では、常に自己にはそれに対立する対象が存在し、その対象と自己が統一する円環が述べられていた。これを今回はファツションに当てはめて考えてきたが、人生におきかえることも出来るかもしれない。人は一人では生きていけない。自己が自己であるためには他者という存在が必要である。その他者と時には対立しながらも、分かち合うことで自分自身は成長することができる。

身勝手な人や、凶悪事件が多いといわれる現代において、自己は、他者という存在によって、自己自身でいられること、だからこそ他人を思いやることを再確認するべきである、という点で、『精神現象学』における「自己意識」の考察に学ぶ価値があるのではないだろうか。

〔文献〕

- ・ G. W. F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, Werke in zwanzig Bänden 3, Frankfurt a. M., 1970.
- ・ 榎山欽四朗訳、『精神現象学』(上)、平凡社、一九九七年。
- ・ 加藤尚武著、『ヘーゲル「精神現象学」入門』、有斐閣

選書、一九八三年。

- ・ ジョアン・エントウイスル著、鈴木信雄訳、『ファツションと身体』、日本経済評論社、二〇〇五年。
- ・ 鷲田清一著、『垂直のファツション、水平のファツション』、岩波書店、一九九六年。
- ・ 北山晴一著、『モードの権力』、岩波書店、一九九六年。

〔注〕

- (1) 北山晴一著、『モードの権力』において、エレガンスの構造的な特徴は、他者との差異であると述べている。他と違うことが価値のあることであり、それがエレガンスの基本要素である。
- (2) 鷲田清一著、『垂直のファツション、水平のファツション』において、ニーチェの言葉が引用されている。「各人にとっては、自己自身がもっとも遠い者である。」この言葉を各人の身体経験に転用するならば、各人にとっては自分の身体がもっとも遠いといえると述べている。
- (3) 鷲田清一氏は「感覚(享受されたもの)と意味(何かとしてとらえた身体)」という二つのセンスのズレを

「不整合」と述べている。本文はこれを引用した。

(4) 「意味」とは、記号において、直観の対象に恣意的につけ加えられたものである。ヘーゲルは次のように述べている。表象が「外的定在から解放されて、主観化されるとき、「外的定在と内的表象は互いに異なるものとして対抗」している。ある外的定在を、「それに対応するわけでもなく、内容の面からいっても、それと異なっている一表象」と「恣意的に」連結して、「前者が後者の表象または、意味になるようにすることに よって、その外的存在は記号になる」。ここではファッションは記号となるので、それにおいて、直観の対象に恣意的に付け加えられたものということである。

(5) 意識に表象される事柄一般を意味する。

(6) ヘーゲルにおいて、統一は合一、総体性、全体などの概念とほぼ等価的であり、彼の思索の基底を示す重要な概念である。

(7) 対象的事物や状態や出来事などにおける、真なるもの、本質的なもの、内面的なものは、思惟によって把握されうる普遍的なものである。

(8) ヘーゲルの体系は多くの円環からなる一つの巨大な円環を形作る。それは円環の中に円環があるという入

れ子構造を形作り、それによって、部分と全体は常に同型となる。円環が体系における論理展開の究極の単位だとも言える。